

鹿児島県鹿児島市方言における疑問文音調のイントネーション
－動詞アクセントおよび疑問文末詞との関係に着目して－

九州大学文学部
言語学・応用言語学専門分野
1LT17168R
2017年（平成29年）入学
前原千紗
2021年（令和3年）1月提出

要旨

本論文の目的は、鹿児島県鹿児島市方言を対象に、疑問文音調のイントネーションについて動詞アクセントおよび疑問文末詞との関係に着目した記述を行うことである。鹿児島市方言のアクセントは二型であり、語末から二番目の音節を高く発音するA型と、語末音節を高く発音するB型が区別される(平山 1951)。一方、アクセント型は疑問文音調のイントネーションにも影響することが知られる。太田(2002)は、若年層ではA型真偽疑問文・B型真偽疑問文・B型疑問詞疑問文では疑問のイントネーションは上昇が容認され、A型疑問詞疑問文では下降が容認されたとした。しかし、太田(2002)は実験に聴取実験を用いており、具体的にどのように産出されるか不明である。また、太田(2002)は疑問文末詞ナ・カ・ヤ・ケのうち若年層ではケ以外使われていないとする木部(2000)を参考に調査を実施しており、中年層や老年層での産出がどのようになるかは明らかにしていない。さらに、文末詞の年代差による使用頻度や程度に関しても明らかにしていない。

本論文では、太田(2002)の聴取実験結果で説明できない部分や不明点、さらに新規な事実を、インフォーマントへの調査で明らかにした。すなわち、疑問文音調のイントネーションとアクセント型の関係については動詞のアクセント型に関わらず、平叙と疑問はイントネーションパターンによって区別されることを示した。ただし、区別の仕方はアクセント型で異なり、A型動詞では、真偽疑問文/疑問詞疑問文に関わらず疑問のイントネーションは上昇で発音され、平叙と疑問の区別がされた。一方、B型動詞では真偽疑問文/疑問詞疑問文に関わらず疑問のイントネーションは下降で産出され、平叙と疑問の区別がされた。なお、若年層においてはB型動詞疑問詞疑問文のイントネーションはB型アクセントによるLevel Highの音調にかぶさるRisingの上昇で産出され、太田(2002)で説明できなかった部分を明らかにした。

また、疑問文末詞に関しては疑問文末詞を付与しても動詞のアクセント型には影響しないことを調査で明らかにした。ゼロ文末詞文の際にA型で発音された動詞は文末詞を付与してもA型で発音され、B型で発音された動詞は文末詞を付与してもB型で発音された。

本論文は、鹿児島市方言における疑問文音調のイントネーションについて動詞アクセントおよび疑問文末詞との関係に着目した記述を行う。

目次

1.はじめに.....	1
1.1. 対象とする方言	1
1.2. 二型アクセント	1
2.先行研究.....	1
2.1. 疑問文イントネーション	1
2.2. 疑問を表す文末詞	2
2.3. 動詞述語文のアクセントと韻律の関係.....	5
3.疑問文イントネーションの記述.....	7
3.1. 調査について	7
3.2. アクセント型別の調査例文リストの設計	7
3.3. 調査の結果	11
3.3.1. A型真偽疑問文	11
3.3.2. B型真偽疑問文.....	12
3.3.3. A型疑問詞疑問文	13
3.3.4. B型疑問詞疑問文	14
3.4. 考察	16
4.文末詞とイントネーションの関係	18
4.1. 文末詞ごとのイントネーションパターン	18
4.1.1. 文末詞ナ	18
4.1.2. 文末詞カ	19
4.1.3. 文末詞ヤ	19
4.1.4. 文末詞ケ	20
4.2. アクセントと文末詞有無の影響	20
5.結論と今後の課題	21

1. はじめに

本研究の目的は、鹿児島県域方言の鹿児島市方言を対象とし、疑問文音調におけるイントネーションに関して、動詞アクセントおよび疑問文末詞の有無に着目しながら記述することである。以下では、対象となる方言と言語現象について述べる。

1.1. 対象とする方言

鹿児島市方言は、九州の南端、鹿児島県本土のほぼ中央に位置する鹿児島市で話されている方言である。平山(1997)によると、鹿児島県内の方言はトカラ列島と奄美大島の間を境にして、大きく南九州方言と奄美方言とに二分される。鹿児島市方言はこのうち南九州方言にあたり、方言区画は薩隅方言となっている。本研究では、鹿児島市方言を対象に調査を行う。

1.2. 二型アクセント

鹿児島市方言では、促音、語中の撥音、連母音の後の部分、母音の無声化した音節が前の音節と連なりあって、アクセントの高さ低さの単位となる(上村 1983)。ここでは、そういう単位を音節と圈点することによって、とくに区別することにする。

鹿児島市方言では、語の長さによらず、また品詞によらず、アクセントの型は以下の2種類のいずれかである。なお、○は一つの音節を表し、本稿で用いている角括弧は木部(2000:7)に倣ったもので[]を音調の上がり目、]を音調の下がり目とする。

$$\begin{aligned} \text{A型} &= \text{○} [\text{○}] \text{○} \quad \text{○} [\text{○}] \text{○} \quad \text{○} \text{○} [\text{○}] \text{○} \quad \text{○} \text{○} \text{○} [\text{○}] \text{○} \quad \cdots \cdots \\ \text{B型} &= [\text{○} \quad \text{○} [\text{○}] \quad \text{○} \text{○} [\text{○}] \quad \text{○} \text{○} \text{○} [\text{○}] \quad \text{○} \text{○} \text{○} \text{○} [\text{○}] \quad \cdots \cdots \end{aligned}$$

鹿児島市の二型アクセントは、このように後ろから2音節目が高く最終音節が下がる型と、最終音節のみが高く上がる型の2種類である(平山 1951)。本稿では平山(1951)に倣い、後ろから2音節目が高く最終音節が下がる型をA型、最終音節のみが高く上がる型をB型として区別する。なお、全体が1音節の場合、上村(1983:302)は「A型はその音節内部で下降、B型は高平に発音される」とし、木部(2012)は、A型が音節内で下降する型に、B型が最初から高く下降のない型に実現すると指摘している。本稿では、先に示したA型1音節における○]は音節内部での下降、B型1音節における[○]は最初から高く下降のない型として区別する。

2. 先行研究

2.1. 疑問文イントネーション

標準語において一般的にイントネーションは、疑問文の場合は上昇となり、平叙文の場合

は非上昇になるといわれている。ところが、鹿児島市方言では平山(1997)も指摘するように疑問文が上昇調をとらずに下降調をとるという特徴がある。平山(1997)は(1a)(1b)(1c)は全て「あれは山田さんですか」という疑問文である、としている。しかしこれは疑問文末詞ナ・カ・ヤが付与された場合の記述であり、疑問文末詞ナ・カ・ヤが付与されていない場合に音調がどのようになるのかの記述はなされていない。

- (1) a. [ア]ヤ ヤマダ[サ]ン ナ
 b. [ア]ヤ ヤマダ[サ]ン カ
 c. [ア]ヤ ヤマダ[サ]ン ャ

一方、平山(1997)は若年層では以下の(2a)のように一旦上昇してから下降するイントネーションが疑問文に使われるようになってきた、と指摘している。また、若年層の場合には(2b)のように文末詞が付与されていなくても一旦上昇してから下降するイントネーションが疑問文に使われるようになってきたとしている。

- (2) a. アシ[タ] ヤ[ス]ミ [ケ]
 b. シン[ブ]ン ヨ[ム] [平山(1997:13)]

このように、平山(1997)は、鹿児島市方言において疑問文が上昇調をとらずに下降調をとるとし、若年層においては一旦上昇してから下降するイントネーションが疑問文に使われるようになってきたとしている。

しかし、平山(1997)は鹿児島市方言の特徴である二型アクセントや、真偽疑問文(Yes/Noで回答できる疑問文)や疑問詞疑問文(なに、どれといった疑問詞を付与した疑問文)といった問い合わせ方の違いがイントネーションにどのような影響を与えるのかについては言及していない。また、先述した通り平山(1997)は(1a)(1b)(1c)全て「あれは山田さんですか」という疑問文であるとしており、文末詞ナ・カ・ヤの使い分けについては特に言及していない。

本研究では疑問文のイントネーションとアクセント型の関係を明らかにすると共に、文末詞を付与することで疑問文のイントネーションにどのような影響があるのかを調査し、記述する。

2.2. 疑問を表す文末詞

後藤(1994)は、鹿児島市方言の文末詞（後藤の用語で終助詞）には「カ」「ナ」「ネ」「ヤ」「ケ」「カイ」「モンナ」「モンネ」「モンカ」「モンヤ」「ガ」「ド」「デ」「ヨ」「オ」「ダイ」などがあるとしている。そのうち、「カ」「ナ」「ネ」「ヤ」は疑問をあらわすのに用いられ「ナ」は丁寧度が最も高い。また、「ネ」は若い女性に多く用いられ、「ヤ」は若い男性に多く用いられるとしている。また、「ケ」は軽い疑問の気持ちをあらわすとも指摘している。

また、木部(2000)は、鹿児島市方言の文末詞について(3)に示す4種類に分けることが出来るとしている。

- (3) (I) 判断の伝達：ド・ガ・カイ
(II) 内容を聞き手へ伝える：オ・ヨ
(III) 聞き手へ訴える：ナー・ネー
(IV) 質問を表す：ナ・カ・ヤ・ケ

[木部(2000:98)]

本稿では疑問文のイントネーションに関して記述を行うため、(IV)に関して文末詞が表す意味と文末詞が取る音調を挙げる。木部(2000)は、(4)(5)は疑問詞のナイやイツの存在する文、それ以外は疑問詞の存在しない文で、(6)は名詞に直接ナ・カ・ヤ・ケが続いた文、(7)は動詞に続いた文、(8)は準体助詞のトが介在する文であるとしている。

- (4) a. [ア]ヤ [ナイ] ナ (あれは何ですか)
b. [ア]ヤ [ナイ] カ (あれは何か)
c. [ア]ヤ [ナイ] ャ (あれは何か)
d. [ア]ヤ [ナイ] [ケ (あれは何か)]

[木部(2000:108)]

- (5) a. イ[ツ [スッ] ト ナ (いつするのですか)
b. イ[ツ [スッ] ト カ (いつするのか)
c. イ[ツ [スッ] ト ャ (いつするのか)
d. イ[ツ [スッ] ト [ケ (いつするのか)]

[木部(2000:108)]

- (6) a. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ ナ (あれは桜島ですか)
b. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ カ (あれは桜島か)
c. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ ャ (あれは桜島か)
d. [ア]ヤ サ克拉[ジ]マ [ケ (あれは桜島か)]

[木部(2000:108)]

- (7) a. モ [シ]タ ナ (もうしましたか)
b. モ [シ]タ カ (もうしたか)
c. モ [シ]タ ャ (もうしたか)
d. モ [シ]タ [ケ (もうしたか)]

[木部(2000:108)]

- (8) a. モ [シ]タ ト ナ (もうしたのですか)
b. モ [シ]タ ト カ (もうしたのか)

- c. モ [シ]タ ト ャ (もうしたのか)
d. モ [シ]タ ト [ケ (もうしたのか)] [木部(2000:108)]

ナ・カ・ヤ・ケの意味の違いは、ナが年上かあまり親しくない人に対して使われる丁寧な表現、カ・ヤ・ケが同輩・年下か親しい人に対して使われる表現という違いである(木部2000)。疑問文末詞(木部の用語で質問の文末詞)で音調上注目すべきは、一般に疑問文は上昇調を取ると考えられているのに、鹿児島のナ・カ・ヤが下降調を取ることである。実際、標準語の文末詞「か」では、「行きますか↗」のように上昇調にしなければ疑問文にならず、下降調の「行きますか↘」は話し手の納得の意味しか表さない。しかし、木部(2000)は鹿児島市方言では下降調の方が疑問文として普通であると指摘する。木部(2000)は「イントネーション・システムの差というよりも、標準語の「か」と鹿児島方言のナ・カ・ヤの役割の差によると思われる」と推測する。現に、標準語でも文中に疑問詞がある場合のように疑問文が下降調で現れることがある。このような場合には、疑問詞によってその文が疑問文であるということが示されるため、イントネーションによって二重に疑問文であることを示す必要がないのである。このことを参考にすると、鹿児島市方言で疑問文が上昇調をとらないのは、文末詞のナ・カ・ヤが疑問文という文タイプを標示する働きをしているからだと考えられる。

ただし、木部(2000)はナ・カ・ヤを使った疑問文が上昇調で現れることもあると指摘する。それは、不審の度合いが強いときや、聞き手に対して回答を求める度合いが強いときである。例えば、(4b')は「あの変なものは、あれは何か」や「あれが何か、どうしても教えてくれ」のような意味を持ち、(6b')は「あれが本当に桜島なのか」や「あれが何か、どうしても教えてくれ」といった意味を持つ。

- (4) b'. [ア]ヤ [ナイ [カ (あれは何か)]
(6) b'. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ [カ (あれは桜島か)]

また、木部(2000)は、老年層の鹿児島方言では、疑問文は文末詞ナ・カ・ヤをつけて下降音調で、ケをつけた場合は上昇音調で発音されるのが普通としている。しかしながら、太田(2002)は、若年層ではこれらの在来文末詞はほぼ消滅し、ケ以外の文末詞が疑問文で使われることはなくなったと指摘する。ただし、若年層方言の特徴は、ケだけが疑問文で使用されるということだけではなく、たとえば、(9)のように、文末のケの部分で音調が上昇して下降する昇降型の音調が用いられる音声的特色も見られるとしている。木部(2000)はこの音調を「昇降調」と呼んでいる。

- (9) アシ[タ]ヤス[ミ[ケ]]— [木部(2000:110)]

加えて、この昇降の音調が(10a)のノダ疑問文や(10b)の文末詞のない疑問文（以下、ゼロ文末詞文）でも用いられる例があることから、上昇、下降に次ぐ第3のイントネーションをして認める必要があると木部(2000)は主張している。

- (10) a. [モー]シゴ[ト]ワスン[ダ[ノ]]—
 b. [モー]シゴ[ト]ワスン[ダ]— [木部(2000:111)]

2.3. 動詞述語文のアクセントと韻律の関係

太田(2002)は、木部(2000)が述べた鹿児島市方言の新しい疑問文イントネーションと言われる昇降調が広がっているかどうかを、鹿児島市内の二つの大学の学生 196名に対して音声聴取実験によって検証した。なお、音声聴取実験とは録音された実験用音声を聞かせ被験者に判断を求める方式である。太田(2002)は、木部(2000)が述べるよりもし昇降型音調が第3のイントネーションとして確立し、ゼロ文末詞文にまで広がっているのであれば、述語の品詞やアクセントの型に関わりなく文末にかぶさる音調として広がっている様子が観察されねばならないはずだと述べた。しかし、木部(2000)は若年層話者が昇降型の音調をゼロ文末詞文でも使用すると述べるにとどまっており、昇降音調の使用がどのように広がっているかについては明らかではない。太田(2002)が鹿児島方言において若年層を対象に昇降調が広がっているかどうかを音声聴取実験によって検証した上昇調と昇降調の A型真偽疑問文・B型真偽疑問文・A型疑問詞疑問文・B型疑問詞疑問文における選択率平均値を表1に示す。

表1：若年層における上昇調と昇降調の選択率平均値

(太田 (2002:25-43) をもとに筆者作成)

	文末語のアクセント	上昇調	昇降調
真偽疑問文	A型	87.5	12.5
	B型	17.9	82.1
疑問詞疑問文	A型	90.7	9.3
	B型	70.9	29.1

なお、太田(2002)が音声聴取実験で用いた音声における文末音調の上昇調、昇降調は図1,2に示すとおりである。太田(2002)は理論的には一度高い/低いところに上がった/下がった音調をさらに上げる/下げる音調や、すでに上がっている音調をさらに上げる音調パターンも可能としながらも、前者は複雑な動きである上、あまり太田(2002)自身が耳にすることがない、後者は強い驚きの表出など別の理由がある場合には起こりうるかもしれないが、真偽の判定を求めるのに疑問を用いる「無標の」状況ではあまり使用されそうにないという理由より除外している。



図 1：上昇調



図 2：昇降調

[太田(2002:29)]

実験結果より、太田(2002)は若年層の鹿児島市方言における疑問文音調についての調査結果を表 2 に示すようにまとめている。

表 2：若年層の鹿児島市方言における疑問文音調についての調査結果

(太田 (2002:25-43) をもとに筆者作成)

	文末語のアクセント	イントネーション	実現ピッチ形
真偽疑問文	A型	上昇	上昇
	B型	下降	昇降
疑問詞疑問文	A型	上昇	上昇
	B型	不明	上昇

上記調査の結果、太田(2002)は少なくとも昇降型音調のゼロ文末詞文への広がりを示す有力な情報は見つからなかったしながらも、鹿児島市方言における疑問文の音調に関して以下の点を明らかにしている。

(11) 真偽疑問文：述語（動詞）のアクセントにより、文末に現れる音調が決まる傾向がある。すなわち、A型述語の場合は上昇音調を、B型述語の場合は昇降音調を取ることが多い。

疑問詞疑問文：述語（動詞）のアクセントと関係なく、上昇音調を取る傾向にある。
その際、述語部分のアクセントは目立たないことが多い [太田(2002:38)]

太田(2002)は調査で、録音された実験用音声を聞かせて被験者に判断を求めるという音声聴取実験を実施する際に可能な文末音調を先程示した図 1, 2 の 2 種類に絞っている。被験者が実験用音声の内、図 1, 2 以外のイントネーションで産出される文があると感じても、上昇調か昇降調のどちらかで回答しなければならない。そのため被験者が違和感を覚えても看過している可能性がある。また、B型疑問詞疑問文において B型はそもそも最後の音節がアクセントによって高く発音されるが、イントネーションを加味した実現ピッチ形も上昇となっている。これが、アクセントによる Level High の音調にかぶさる Rising の上昇を

意味するのか、あるいはアクセントによる Level High そのものを指すのか、太田の記述からはわからない。仮に後者の場合、B型疑問詞疑問文における疑問のイントネーションでは例外的に平叙と疑問の区別はつかないことになる。この点も明らかにしなければならない。

3. 疑問文イントネーションの記述

3.1. 調査について

以下に、調査概要を示す。

調査協力者：US 氏（21 歳女性）、KA 氏（37 歳女性）、MK 氏（54 歳女性）

HT 氏（86 歳女性）、HT 氏（88 歳男性）

調査手段：MK 氏、HT 氏（86 歳女性）、HT 氏（88 歳男性）に関しては調査票を用いた面接調査、US 氏、KA 氏に関しては調査票を用いた非対面調査を実施した。（非対面調査には zoom を使用した。）

音響分析：録音ファイルを Switch 音声ファイル変換ソフトにて WAV 形式に変換。その後、praat を使用した。

アクセント型別の調査例文リストを設計し、鹿児島市方言における動詞アクセント型の確認調査および疑問文末詞を付与した際のイントネーション調査を実施した。

3.2. アクセント型別の調査例文リストの設計

本研究においては、平山（1960）の動詞分類をもとに A 型真偽疑問文・B 型真偽疑問文・A 型疑問詞疑問文・B 型疑問詞疑問文の調査票を作成し、疑問文音調のイントネーションはどういうに産出されるかの調査を実施する。

平山（1960）では二音節動詞・三音節動詞・四音節動詞における A 型・B 型の分類を行っている。平山（1960）の分類を（12）に示す。

（12）平山（1960）の分類

①A 型二音節動詞

行く、産む、売る、追う、置く、押す、貸す、刈る、聞く、汲む、消す、咲く、
敷く、死ぬ、知る、吸う、空く、添う、散る、突く、継ぐ、積む、釣る、飛ぶ、
泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、張る、引く、減る、巻く、増す、揉む、止む、
遣る、言う、割る、着る、為る、煮る、寝る

②B 型二音節動詞

会う、編む、打つ、書く、勝つ、噛む、切る、食う、蹴る、漕ぐ、刺す、住む、
剃る、立つ、取る、縫う、脱ぐ、練る、飲む、這う、吐く、吹く、降る、乾す、

掘る、蒔く、待つ、漏る、読む、来る、出る、見る

③A型三音節動詞

上がる、遊ぶ、当たる、浮かぶ、歌う、送る、飾る、変わる、嫌う、削る、搜す、探る、沈む、慕う、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、譲る、明ける、植える、借りる、枯れる、消える、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える、乾く、違う、懷く

④B型三音節動詞

余る、祈る、祝う、動く、移る、恨む、選ぶ、起こす、落とす、思う、帰る、崩す、碎く、曇る、縛る、叩く、頼む、作る、包む、詰まる、照らす、悩む、習う、憎む、濁る、僻む、光る、許す、生きる、起きる、落ちる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、晴れる、歩く、隠す、はに入る（原文ママ）

⑤A型四音節動詞

嘲る、窺う、疑う、悲しむ、従う、養う、与える、重ねる、並べる、始める、表わす（原文ママ）

⑥B型四音節動詞

驚く、喜ぶ、集める、数える、調べる、助ける、流れる、離れる、隠れる

平山(1960)より筆者が選択した動詞 20 語を平叙文で KA 氏に発音してもらった。その結果、平山(1960)で示された鹿児島市方言における A型・B型の分類とすべて一致していることを確認した（表 3）。本調査では平山(1960)の分類を参考に表 4・表 5 で示す例文と導入文脈を作成し、調査を実施した。なお、調査例文に関しては平山(1960)が示した動詞 170 語をもとに例文を 170 文作成した上で、日常会話で使用する頻度が高いと筆者が判断した 20 文を選出した。

表 3：事前調査で使用した語と調査結果

動詞語例	読み	平山(1960)の分類	KA 氏の発音
行く	イク	A型	A型
聞く	キク	A型	A型
乗る	ノル	A型	A型
着る	キル	A型	A型
煮る	ニル	A型	A型
歌う	ウタウ	A型	A型

送る	オクル	A型	A型
運ぶ	ハコブ	A型	A型
植える	ウエル	A型	A型
捨てる	ステル	A型	A型
会う	アウ	B型	B型
書く	カク	B型	B型
切る ¹	キル	B型	B型
飲む	ノム	B型	B型
見る	ミル	B型	B型
思う	オモウ	B型	B型
帰る	カエル	B型	B型
作る	ツクル	B型	B型
習う	ナラウ	B型	B型
歩く	アルク	B型	B型

表4：調査に用いた例文と導入文脈（真偽疑問文）

音節 アクセント型		語例	読み	導入文脈	真偽疑問文/ 文末詞なし
二 音 節	A1	行く	イク	喫茶店を指差して	ここ行く
	A2	聞く	キク	あるアーティストの CD を 指差して	これ聞く
	A3	乗る	ノル	次発の電車を指差して	これ乗る
	A4	着る	キル	羽織を差し出して	これ着る
	A5	煮る	ニル	人参を指差して	これ煮る
三 音 節	A6	歌う	ウタウ	曲名を指差して	これ歌う
	A7	送る	オクル	あるダンボールを指差して	これ送る
	A8	運ぶ	ハコブ	クリスマスツリーの入った箱を 指差して	これ運ぶ
	A9	植え る	ウエル	苗を指差して	これ植える
	A10	捨て る	ステル	着古した服を指差して	これ捨てる

¹ 事前調査前は「食う（クウ）」を設定していたが、「食う」は日常会話で使用せず90代が使用するイメージがあるというKA氏の発言を受け、「切る」に変更した。

二 音 節	B1	会う	アウ	電話で談笑しながら	明日会う
	B2	書く	カク	ペンと用紙を差し出して	何か書く
	B3	切る	キル	食べ物を差し出して	これ切る
	B4	飲む	ノム	飲み物を差し出して	これ飲む
	B5	見る	ミル	友人を家に招きくつろぎながら	何か見る
三 音 節	B6	思う	オモウ	相手の考えを推測し言語化して	こう思う
	B7	帰る	カエル	娘/息子と電話しながら	明日帰る
	B8	作る	ツクル	レシピを指差して	これ作る
	B9	習う	ナラウ	娘/息子に習い事のパンフレットを見せながら	これ習う
	B10	歩く	アルク	旅行先で地図を指差して	ここ歩く

表5：調査に用いた例文と導入文脈（疑問詞疑問文）

音節	アクセント型	語例	読み	導入文脈	疑問詞疑問文/ 文末詞なし
二 音 節	A1	行く	イク	週末に行く場所を相談しながら	どこ行く
	A2	聞く	キク	友人を家に招き CD ボックスを差し出して	何聞く
	A3	乗る	ノル	旅行の交通手段を相談しながら	何乗る
	A4	着る	キル	服屋で試着する服を選びながら	何着る
	A5	煮る	ニル	煮物を作る母の手伝いをしながら	何煮る
三 音 節	A6	歌う	ウタウ	カラオケで選曲をしながら	どれ歌う
	A7	送る	オクル	引っ越しの手伝いをしながら	どれ送る
	A8	運ぶ	ハコブ	シーズン外のものを倉庫に移動させながら	どれ運ぶ
	A9	植える	ウエル	家庭菜園の手伝いをしながら	どれ植える
	A10	捨てる	ステル	掃除を手伝いながら	何捨てる
二 音 節	B1	会う	アウ	友人と遊びの約束を立てながら	いつ会う
	B2	書く	カク	引っ越しする友人への寄せ書きをつくりながら	何書く
	B3	切る	キル	ある野菜を指差して	どれ切る
	B4	飲む	ノム	飲食店でメニューを見ながら	何飲む
	B5	見る	ミル	映画館にふらっとよって	何見る

三 音 節	B6	思う	オモウ	議論の最中に	どう思う
	B7	帰る	カエル	娘/息子に電話をして	いつ帰る
	B8	作る	ツクル	レシピ本を片手に会話して	どれ作る
	B9	習う	ナラウ	娘/息子に習い事のパンフレットを見せて	どれ習う
	B10	歩く	アルク	旅行先の地図を見ながら	どこ歩く

3.3. 調査の結果

疑問文のイントネーションとアクセント型に関して、インフォーマントごとの産出結果をまとめた表を表 6 に示す。

表 6：インフォーマントへの調査結果（ゼロ文末詞文のみ）

	疑問のイントネーション			
	US 氏 (21 歳女性)	KA 氏 (37 歳女性)	MK 氏 (54 歳女性)	HT 氏 (86 歳女性)
A 型 真偽疑問文	上昇	上昇	上昇	上昇
B 型 真偽疑問文	下降	下降	上昇	下降
A 型 疑問詞疑問文	上昇	上昇	下降 (B 型で発音)	上昇
B 型 疑問詞疑問文	上昇	下降 (上昇も可)	下降	下降

A 型真偽疑問文・B 型真偽疑問文・A 型疑問詞疑問文・B 型疑問詞疑問文における調査文ごとの産出結果を 3 節 1 項～3 節 4 項で示す。

3.3.1. A 型真偽疑問文

調査の結果、どのインフォーマントも図 3 のように A 型真偽疑問文では疑問のイントネーションが上昇調で産出された²。調査結果を表 7 に示す。

² HT 氏(88 歳男性)は文末詞を付けずに疑問文を発話することはしない、とのことで調査例文すべてに文末詞を付与したため表 7～10 には記載しない。

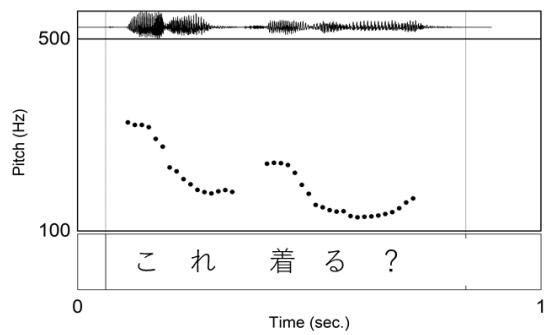


図3：A型真偽疑問文「これ着る？」の産出 (KA氏)

表7：A型真偽疑問文におけるイントネーション

	疑問のイントネーション(産出)			
A型 真偽疑問文	US氏 (21歳女性)	KA氏 (37歳女性)	MK氏 (54歳女性)	HT氏 (86歳女性)
ここ行く	上昇	上昇	上昇	上昇
これ聞く	上昇	上昇	上昇	上昇
これ乗る	上昇	上昇	上昇	上昇
これ着る	上昇	上昇	上昇	上昇
これ煮る	上昇	上昇	上昇	上昇
これ歌う	上昇	上昇	上昇	上昇
これ送る	上昇	上昇	上昇	上昇
これ運ぶ	上昇	上昇	上昇	上昇
これ植える	上昇	上昇	上昇	上昇
これ捨てる	上昇	上昇	上昇	上昇

3.3.2. B型真偽疑問文

B型真偽疑問文におけるインフォーマントごとの産出結果を表8に示す。

表8：B型真偽疑問文におけるイントネーション

	疑問のイントネーション(産出)			
B型 真偽疑問文	US氏 (21歳女性)	KA氏 (37歳女性)	MK氏 (54歳女性)	HT氏 (86歳女性)
明日会う	下降	下降	下降	下降
何か書く	下降	下降	上昇	下降
これ切る	下降	下降	上昇	下降
これ飲む	下降	下降	上昇	下降

何か見る	下降	下降	上昇	下降
こう思う	下降	下降	上昇	下降
明日帰る	下降	下降	上昇	下降
これ作る	下降	下降	上昇	下降
これ習う	下降	下降	上昇	下降
ここ歩く	下降	下降	上昇	下降

US 氏、KA 氏、HT 氏(86 歳女性)に関しては、太田(2002)の結果と同様に疑問のイントネーションは図 4 に示すように下降で発音されていた。

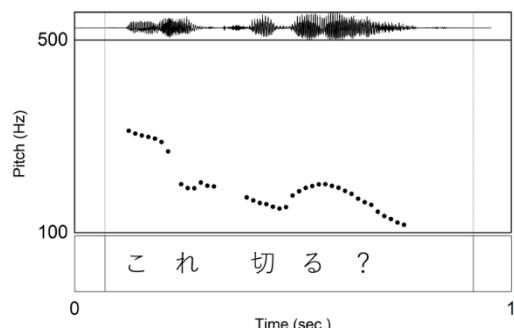


図 4：B 型真偽疑問文「これ切る？」の産出 (KA 氏)

しかし、MK 氏は「明日会う？」の疑問のイントネーションは下降で産出されたものの、他の 9 文に関しては最後の音節内で上昇して発音しており、他のインフォーマントとは異なる結果が得られた。

3.3.3. A 型疑問詞疑問文

A 型疑問詞疑問文におけるインフォーマントごとの産出結果を表 9 に示す。

表 9：A 型疑問詞疑問文におけるイントネーション

疑問のイントネーション(産出)				
A 型 疑問詞疑問文	US 氏 (21 歳女性)	KA 氏 (37 歳女性)	MK 氏 (54 歳女性)	HT 氏 (86 歳女性)
どこ行く	上昇	上昇	上昇	上昇
何聞く	上昇	上昇	下降	上昇
何乗る	上昇	上昇	下降	上昇
何着る	上昇	上昇	下降	上昇
何煮る	上昇	上昇	下降	上昇
どれ歌う	上昇	上昇	下降	上昇

どれ送る	上昇	上昇	下降	上昇
どれ運ぶ	上昇	上昇	下降	上昇
どれ植える	上昇	上昇	下降	上昇
何捨てる	上昇	上昇	下降	上昇

US 氏、KA 氏、HT 氏(86 歳女性)に関しては、太田(2002)の結果と同様に疑問のイントネーションは図 5 に示すように上昇で発音されていた。

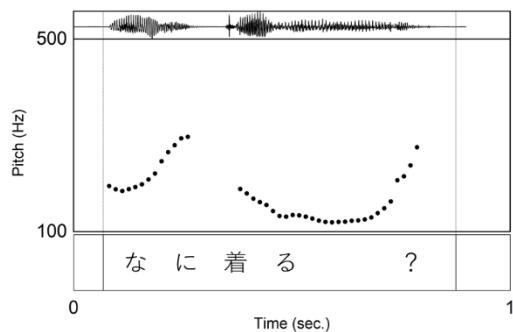


図 5：A 型疑問詞疑問文「何着る？」の産出（KA 氏）

しかし、MK 氏は筆者が作成した A 型疑問詞疑問 10 文全て A 型でなく B 型で発音した上で、「どこ行く？」のみ疑問のイントネーションは上昇したもの、他の 9 文は全て疑問のイントネーションは下降していた。A 型真偽疑問文における調査の際には、平山(1960)のアクセント分類による A 型動詞を MK 氏も A 型で発音しており、動詞のアクセント型自体が他のインフォーマントと異なるというのは考えにくい。

3.3.4. B 型疑問詞疑問文

B 型疑問詞疑問文におけるインフォーマントごとの産出結果を表 10 に示す。

表 10：B 型疑問詞疑問文におけるイントネーション

疑問のイントネーション(産出)				
B 型 疑問詞疑問文	US 氏 (21 歳女性)	KA 氏 (37 歳女性)	MK 氏 (54 歳女性)	HT 氏 (86 歳女性)
いつ会う	上昇	下降	下降	下降
何書く	上昇	下降	下降	下降
どれ切る	上昇	上昇	下降	下降
何飲む	上昇	下降	下降	下降
何見る	上昇	下降	下降	下降
どう思う	上昇	下降	下降	下降

いつ帰る	上昇	下降	下降	下降
どれ作る	上昇	下降	下降	下降
どれ習う	上昇	下降	下降	下降
どこ歩く	上昇	下降	下降	下降

US 氏の【上昇】は、図 6 に示すように B 型アクセントによる Level High の音調にかぶさる Rising の上昇で産出された。

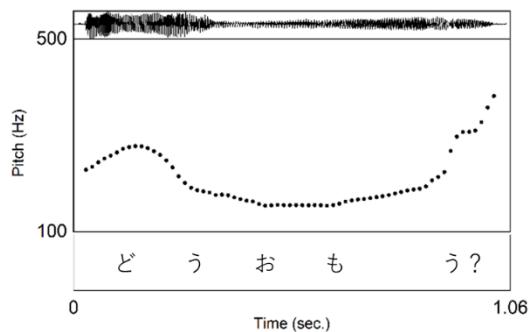


図 6：B 型疑問詞疑問文「どう思う？」の産出（US 氏）

また、MK 氏・HT 氏（86 歳女性）は 10 文全て疑問のイントネーションで下降し、実現ピッチは昇降となっていたが KA 氏は発音する際に図 7 に示す上昇も容認でき、非文ではないとした上で図 8 に示す下降のほうがどちらかと言えばより自然であると述べていた。

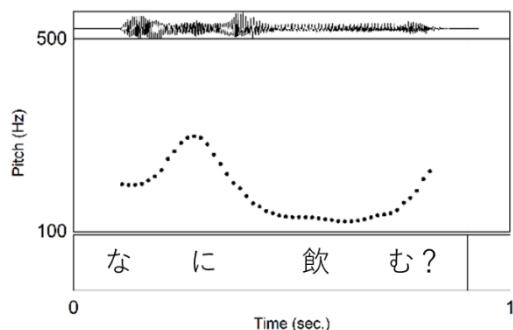


図 7：B 型疑問詞疑問文「なに飲む？/上昇」の産出（KA 氏）

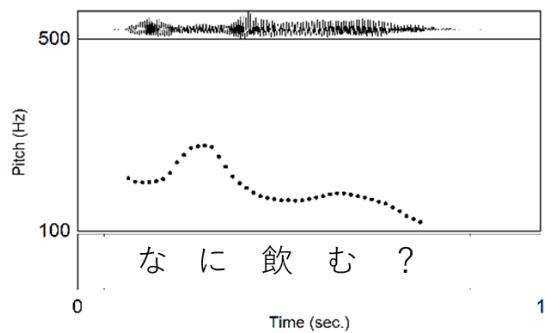


図8：B型疑問詞疑問文「なに飲む？」/下降」の産出（KA氏）

3.4. 考察

今回の調査における疑問文音調のイントネーションと動詞アクセント型の関係は、A型真偽疑問文・B型真偽疑問文・A型疑問詞疑問文では MK 氏がB型真偽疑問文のイントネーションを下降でなく上昇で発音し、A型疑問詞疑問文において平山(1960)のアクセント分類によるA型動詞をB型で発音した上で疑問のイントネーションを下降で発音するなどインフォーマントによって多少結果が異なった部分はあったものの、概ね太田(2002)の調査結果と一致していた。しかし、B型疑問詞疑問文における疑問のイントネーションは、US 氏はアクセントによる Level High の音調にかぶさる Rising の上昇で発音したものの KA 氏・MK 氏・HT 氏(86 歳女性)は下降で発音しており、疑問詞疑問文は述語（動詞）のアクセントと関係なく、上昇音調を取る傾向にあるという太田(2002)の結果とは異なった。

また、太田(2002)は B 型疑問詞疑問文において疑問のイントネーションが上昇音調を取る場合の産出に関してアクセントによる Level High の音調にかぶさる Rising の上昇を意味するのか、あるいはアクセントによる Level High そのものを指すのか明らかにしていなかったが、今回の鹿児島市方言の調査においては、US氏の結果から分かるように、前者の Level High の音調にかぶさる Rising の上昇を意味することが判明した。以上二点の原因についての分析を本項で記述する。

3章3節で先出した疑問文のイントネーションとアクセント型に関して、インフォーマント毎の産出結果をまとめた表を表11に改めて示す。

表11：インフォーマントへの調査結果（ゼロ文末詞文のみ）

	疑問のイントネーション			
	US 氏 (21 歳女性)	KA 氏 (37 歳女性)	MK 氏 (54 歳女性)	HT 氏 (86 歳女性)
A型 真偽疑問文	上昇	上昇	上昇	上昇
B型 真偽疑問文	下降	下降	上昇	下降

A型 疑問詞疑問文	上昇	上昇	下降 (B型で発音)	上昇
B型 疑問詞疑問文	上昇	下降 (上昇も可)	下降	下降

今回の鹿児島市方言の調査において、最後から二音節目が上昇し最後の音節で下降する A 型では疑問のイントネーションで上昇し、最後の音節で上昇する B 型では疑問のイントネーションは下降するという結果が得られた。これは、平叙と疑問を区別するためにある意味自然な現象であると考えられる。

太田(2002)は、実験用音声資料提供者が疑問詞疑問文において述語部分に無理やりアクセントをつける発音は不自然だと回答したことにより、実験用音声として述語部分に明確なアクセントのない音声を上昇音調の刺激音声として用い、昇降音調は B 型文と同様に述語にアクセントをつけたままで調査を実施していた。その結果、B 型疑問詞疑問文において前者の選択率平均値が 70.9 となっていたのである。今回の調査において、US 氏は B 型疑問詞疑問文を上昇で発音し、MK 氏・HT 氏(86 歳女性)は昇降で発音し、KA 氏は上昇・昇降何れも容認できるとした上で、昇降のほうが自然に感じるとしていた。太田(2002)は調査対象を全て当時の大学生としていたが、年代別に調査するとこのように(太田の実験当時の大学生と同年代である) 30 歳~40 歳代で昇降調が実際に発話されることがわかった。今回の調査においてアクセント型のみに着目すると、(13)のような一般化が可能である。

(13) 動詞のアクセント型に関わらず、平叙と疑問はイントネーションパターンによって区別される。

ただし、区別の仕方はアクセント型で異なる。A 型動詞では、真偽疑問文/疑問詞疑問文に関わらず疑問のイントネーションは上昇で発音され、平叙と疑問の区別がされる。一方、B 型動詞では真偽疑問文/疑問詞疑問文に関わらず疑問のイントネーションは下降で産出され、平叙と疑問の区別がされる。なお、若年層においては B 型アクセントによる Level High の音調にかぶさる Rising の上昇で平叙と疑問の区別をつけることもある。太田(2002)と本論文の結果の比較を表 12 に示す。

表 12：太田(2002)と本論文の比較

	文末語のアクセント	太田 (聴覚)	本論文 (産出)
真偽疑問文	A型	上昇	上昇
	B型	下降	下降
疑問詞疑問文	A型	上昇	上昇
	B型	不明	下降 (上昇)

4. 文末詞とイントネーションの関係

4.1. 文末詞ごとのイントネーションパターン

4.1.1. 文末詞ナ

疑問文末詞ナに関しては、US 氏・KA 氏・MK 氏は使用しないと回答した。HT 氏(86 歳女性)は日常生活で使用することはある、と回答し HT 氏(88 歳男性)に関しては、文末詞を付与せずに疑問文を言うのは違和感があるとのことで調査例文すべてに文末詞ナを付与して発音した。このことより今回の調査では若年層/中年層は文末詞ナを使用しないが老年層は使用することが判明した。

HT 氏(88 歳男性)における A 型真偽疑問文「これ着る？」の文末詞ナを付与した場合の産出は図 9 に示すように /ki/ は高いアクセントで発音され、「やっと」で下降し文末詞「ナ」でまた上昇した後、疑問のイントネーションで下降していることが見て取れる。文末詞ナを付与しても A 型動詞は A 型で発音されており、直前の動詞アクセント型に影響はないようだ。

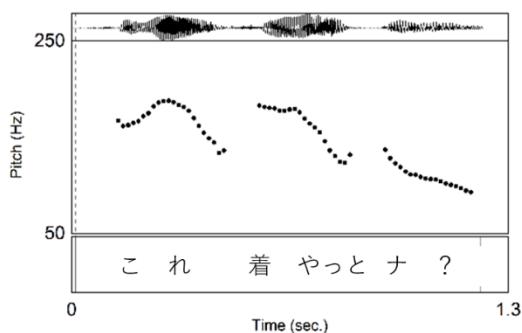


図 9：A 型真偽疑問文「これ着る？」の産出 (HT 氏/88 歳男性)

なお、「着やっとナ」の語形に関しては、(14)に示す形態構造から派生されたと推測する。松丸(2019)は動詞の派生接辞に尊敬(HON)-(i)jar-がある、と指摘しており、HT 氏(88 歳男性)によって /jar/ が産出されたのは木部(2000)が疑問文末詞ナが年上かあまり親しくない人に対して使われる丁寧な表現としたように、文末詞ナのもつ意味が影響していると考えられる。また、「着やるとナ」ではなく促音化して発音されている点に関しては、平塚(2018)が鹿児島県鹿児島市方言において動詞の /ru/ は基本的に促音化する(kir-u>kiQ, mi-ru>miQ など)と指摘しており、今回も「着る」の /ru/ で促音化したと考えられる。

- (14) kijarrutona
ki-jar-ru=to=na
着-HON-NPST=FN=SFP

4.1.2. 文末詞カ

疑問文末詞カに関しては、US 氏・KA 氏は使用しないと回答した。HT 氏(86 歳女性)・HT 氏(88 歳男性)は調査例文には付与しなかったものの日常生活で使用することはあると回答した。MK 氏に関しては、日常生活で文末詞カを単独で使用することはあまりないと回答したもの、図 10 に示すようにカネはよく疑問文に付与すると述べていた。ただし、カネ自体が質問を表す一つの文末詞として機能しているのかどうか定かではない。木部(2000)は、カは鹿児島市方言における疑問文末詞で、ネは鹿児島市方言における聞き手に訴える文末詞と指摘しているが、これらが結合して一つの文末詞として機能するという記述はない。真偽疑問文・疑問詞疑問文は、共に質問に対し答えが返ってこないと完結しないコミュニケーションだが、「どれ運ぶカネ？」は答えが返ってこなくても終えることができる、すなわち自問の文である。よって、カネが文末詞でない可能性もある。

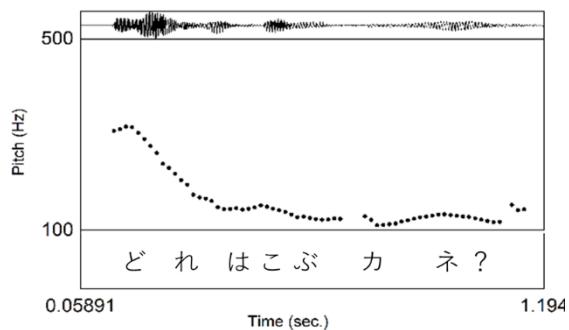


図 10 : A 型疑問詞疑問文「どれ運ぶカネ？」の産出 (MK 氏)

ゼロ文末詞文における A 型真偽疑問文の際は、平山(1960)のアクセント分類による A 型を MK 氏も A 型で発音していたが、A 型疑問詞疑問文の際は、平山(1960)のアクセント分類による A 型を MK 氏は B 型で発音していた。しかし、文末詞を付与した「どれ運ぶカネ？」では「運ぶ」は図 10 を参照すると A 型で発音されている。文末詞を付与しても、動詞のアクセント型には影響がないようだ。また、カで一旦下降し、ネで上昇した後に疑問のイントネーションでまた下降していることも分かる。

4.1.3. 文末詞ヤ

疑問文末詞ヤに関しては、US 氏・KA 氏・MK 氏は使用しないと回答した。HT 氏(86 歳女性)・HT 氏(88 歳男性)は日常生活で使用しないことともないと回答はしたが、どのような場面で使用するかといった詳細は不明で文末詞ヤの実態を明らかにすることはできなかった。

4.1.4. 文末詞ケ

疑問文末詞ケに関しては、全てのインフォーマントが使用すると回答した。しかし、使用頻度等に関しては年代差があるようだ。US 氏は、鹿児島市方言が強く出るほうだと自覚しているとした上で、同年代で文末詞ケを全く用いずに疑問文を使用する人もいると回答した。また、文末詞ケを付与することで文全体が柔らかくなる印象もあると回答した。さらに、US 氏は単純に質問の度合いを強くしたいなら(15a)のように文末詞ケは高く発音し上昇したままで、質問の中でも確認をする目的の方が強い際は(15b)のように文末詞ケは高く発音しその後下降すると回答した。

- (15) a. [行]く[ケ] 質問の度合いが強い
 b. [行]く[ケ] 確認の度合いが強い

US 氏は文末詞ケを高く発音した後に上昇するか下降するかで役割が異なると回答したが、KA 氏は文末詞ケに関して、単なる質問というよりは確認の役割を持ち、ニュートラルな疑問文というよりは思い出しのような役割を持つ感覚があると回答した。その際、直前の動詞アクセント型に関わらず、文末詞ケは高く発音されそこから上昇しても下降しても構わないとも回答し、US 氏とは異なる意見であった。

結果的に、US 氏・KA 氏両氏とも文末詞ケは高く発音されると回答した。その際、直前の動詞のアクセント型に対して影響を及ぼさずに発音されるということが産出によって判明した。

4.2. アクセントと文末詞有無の影響

木部(2000)における疑問文末詞の種類と調査結果をもとにすると、鹿児島市方言の疑問文末詞ナ・カ・ヤは老年層のみ用い、文末詞ケはどの年代でも使用されるが若年層や中年層の中にはあまり使用せずゼロ文末詞文を用いて質問を表す人もいるようである。文末詞ナ・カ・ヤ・ケの違いに関わらず、疑問文末詞と動詞のアクセント型においては(16)が言える。

- (16) 疑問文末詞を付与しても、動詞のアクセント型には影響しない。すなわち、ゼロ文末詞文の際に A 型で発音された動詞は文末詞を付与しても A 型で発音され、B 型で発音された動詞は文末詞を付与しても B 型で発音される。

疑問文末詞において文末詞ケのみ若年層や中年層において使われているのは、木部(2000:110)も指摘するように共通語にも「～だっけ」のような「け」があるために、それほど違和感なく若年層に受け入れられるからだろう。木部(2000:110)は鹿児島方言の文末詞ケは標準語の「ケ」とは異なり、標準語のような確認の質問の意味ではなく、普通の質問の意味で使用されたとした。しかし、今回の調査で US 氏は調査結果の際にも述べたように単純

に質問の度合いを強くしたいなら(15a)のようにケは高く発音し、上昇したままで質問でも確認の度合いが強い際は(15b)のようにケは高く発音しその後下降すると回答した。

- (15) a. [行]く[ケ] 質問の度合いが強い
b. [行]く[ケ] 確認の度合いが強い

また、KA 氏は文末詞ケに関して、単なる質問というよりは確認の役割を持ち、ニュートラルな疑問文というよりは思い出しのような役割を持つ感覚があると回答しており、木部(2000)の指摘とは異なっている。US 氏は 3 年、KA 氏は 19 年の外住歴があるため標準語として確認の役割を持つケを使用している可能性もあるが、鹿児島市方言の若年層～中年層にかけては疑問文末詞ケが質問ではなく確認の意味がより強くなっているのではないかと考察する。

5. 結論と今後の課題

今回の鹿児島市方言の調査において、動詞のアクセント型に関わらず、平叙と疑問はイントネーションパターンによって区別されることが判明した。ただし、区別の仕方はアクセント型で異なり、A 型動詞では、真偽疑問文/疑問詞疑問文に関わらずイントネーションは上昇で区別され、平叙と疑問の区別がされる。一方、B 型動詞では真偽疑問文/疑問詞疑問文に関わらず疑問のイントネーションは下降で産出され、平叙と疑問の区別がされる。なお、若年層における B 型動詞の疑問詞疑問文のイントネーションは B 型アクセントによる Level High の音調にかぶさる Rising の上昇で産出された。また、疑問文末詞に関しては疑問文末詞を付与しても動詞のアクセント型には影響しないことが調査で明らかになった。ゼロ文末詞文の際に A 型で発音された動詞は文末詞を付与しても A 型で発音され、B 型で発音された動詞は文末詞を付与しても B 型で発音された。

今後の課題は二点残る。

一つは、インフォーマントの外住歴や親の言語変種等と音調・アクセントの関わりについての考察を深められていない点である。今回の調査でインフォーマントの外住歴や親の言語変種に関して聞き取りは実施したものの、B 型疑問詞疑問文における US 氏の結果や B 型真偽疑問文・A 型疑問詞疑問文における MK 氏の結果は、外住歴が長い/短いことが影響しているのか親の言語変種との関わりが影響しているのかなど原因を明らかにするには至れなかった。無論、筆者が質問した際のイントネーションやアクセントに影響された可能性も否めない。今後調査を実施する際には談話や鹿児島市方言話者同士での会話を録音するといった手法を用いて話者のより自然な発音を産出し、分析する必要がある。

二つは、老年層のインフォーマントを増やして疑問文末詞ナ・カ・ヤのさらなる調査を実施し、現状を明らかにすることである。当初、ゼロ文末詞文に加え文末詞ありの調査例文 40

文も各インフォーマントに発音してもらう予定だった。しかし、若年層や中年層においては「文末詞ヶは必ずしも使用するものでもないし、文末詞ナ・カ・ヤはそもそも使用しない」という意見があり、文末詞ありは文末詞なしと比較し十分な結果が得られないのではないかという判断で文末詞あり文の産出調査を断念し聞き取りへ移行した。HT 氏(88歳男性)に関しては文末詞を付与しないと疑問文として違和感があるとし、HT 氏(86歳女性)に関しては文末詞なしで例文を発音はしてもらったものの、筆者と日常会話をしている際には疑問文末詞以外の文末詞も多用している印象があるため正しい産出ではない可能性もある。鹿児島市方言における文末詞ナ・カ・ヤについては木部(2000)も指摘するようにやはり老年層でのみ使用されている文末詞のようである。今回は、老年層のインフォーマントは2名のみだったが、インフォーマントを増やすことでどのような場合に文末詞を付与するのかや、文末詞により動詞アクセントへの影響があるといった結果が表れる可能性もある。この不明点を明らかにするために、さらに調査・分析を行う必要がある。

参照文献

- 太田一郎(2002)「鹿児島方言の疑問文音調について-動詞述語文のアクセントと韻律の関係-」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』56:25-43.鹿児島大学.
- 上村孝二(1983)「九州方言の概説」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(編)『九州地方の方言』302.東京：国書刊行会.
- 木部暢子(2000)『九州二型アクセントの研究』94-110.東京：勉誠出版.
- 木部暢子(2012)「西南部九州 2型アクセントの特性の比較」『音声研究』16:80-92.
- 後藤和彦(1994)『鹿児島方言の語法研究』169-173.私家版.
- 平塚雄亮(2018)「福岡県福岡市方言」方言文法研究会(編)『全国方言文法辞典資料集(4)活用体系(3)』107-116.
- 平山輝男(1951)『九州方言音調の研究』東京：学界之指針社.
- 平山輝男(1960)『全国アクセント辞典』50-65.東京：東京堂出版.
- 平山輝男(1997)『鹿児島県のことば』2-13.東京：明治書院.
- 松丸真大(2019)「甑島里方言の文法概説」窪薙晴夫・木部暢子・高木千恵(編)『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』1-46.東京：くろしお出版.

略号一覧

HON	尊敬
NPST	非過去
FN	形式名詞
SFP	終助詞

謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々からの恩賜を受けましたことをこの場を借りて深く御礼申し上げます。

まず、鹿児島市方言の話者である本田敬氏、本田多恵子氏、久保薗愛氏、前原恵子氏、上野さくら氏は、調査に協力してくださり質問に対して丁寧に回答してくださりました。話者の方々が調査に協力してくださったおかげで、卒業論文を執筆することができました。

九州大学文学部言語学・応用言語学研究室の下地理則先生にはご多忙の中、日頃から授業や面談で大変お世話になり、調査の際のアドバイスや結論の方向性に関する助言など多くのことをご指導くださいました。久保智之先生、上山あゆみ先生、太田真理先生には講義や演習を通して言語学の基本をご教授くださいました。

言語学・応用言語学の先輩方は、幾度もご助言をいただき、論文の書き方・本論文のためにpraatの使用方法等をご教示いただきました。

また、共に卒業論文執筆に励んだ言語学・応用言語学研究室の同期や講義・演習でお世話になった後輩にも感謝申し上げます。

最後に、22年間いつもそばで温かく見守り、支えてくれた家族に深く感謝いたします。